阿波三峰

親子の鐘の中津峰

朝念暮念

中津峰山如意輪寺
徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008FAX645-0508
http://www.nmt.ne.jp/~nyoirin
nyoirin@nmt.ne.jp

バス便、 9／19 10／17 9：30アミコ前
問い合わせい合わせ ：徳島市バス観光課 088- 652― 2133

河川敷とキャンプ

先般、神奈川県玄倉川の河川敷でキャンプ中いまわしい事故が起こった。現代多くの人々ががアウトドア・スポーツとしてがキャンプに出向くおり、河川の基本的知識を持ち合わせているだろうか。

ある台風接近のとき、飯谷、醍醐寺住職大川戒博さんと、阿南より車に乗り合わせた。飯谷小前の潜水橋にさしかかると「ここの橋を通らず、野上橋を渡りましょう」という。潜水橋の下は数十cm間がある。私は正木ダムのない時代、増水中の野上橋、潜水橋をよく渡った。その経験では大丈夫と思う。だが、大川師曰く「いつ、増水するかわからない」と。この付近は平常でも水位は十cmという目安で変化する。ところが洪水が予測されるときはもっと大きな変化がある。それは上流には正木ダムと勝浦水力発電所があるからだ。

洪水調整のために台風接近等大水が予測されるとき、あらかじめダムの水を徐々に放水して水位を下げておく、大量の水をその空いたところへ入れ、洪水を防ぐことができる。ところが水は資源である。差し引きゼロ以上が予測されないと水不足が生じる。だから、大雨が予測される直前でないと放水しない。警報のサイレンは当山まで聞こえる。私はそれを聞いて、降雨量を予測する。

また、日本の電気事情は火力発電（原子力を含む）を主とする。電気は蓄えがきかない。その蓄えを水力発電で行う。火力発電はタービンの準備時間がかかることによって、火力発電量所ではいつも一定の発電量を保つ。夜間に電力消費は減ると水力発電はやめ、火力のみとし、昼間工場が動き出し需要が増える、お昼休みで電力需要が減る、暑い日となって急に人々は冷房を使い始めたとき需要が急に増える等々の対応を水力発電でおこなう。よって発電所下流は発電量に比例して水量の変化が生じる。

飯谷小前に話をもどす。先述の十cm単位の数位水位の変化とはこのような事情による。こんな危険な河原で水泳、キャンプをしているのである。今、胸までの水位が数分後、頭を越える。そして日本の河川のほとんどは上流にダムがある。

では、こういった危険を知らせるための合図をみんなが知っているであろうか。ある時、阿波池田の池田湖畔でまんだら霊場会」をしていた。会議の途中池田ダムからサイレンが聞こえる。みんな「何事」かという。これから放水する合図である。下流は水位が大きく上昇するので子供たちが泳いでいたら、おぼれる危険があるので避難させなくてはならないと話す。なんとほとんどの人はその意味を知らなかった。河川流域住民には常識でも、都会地で洪水には関係ないという人たちは非常識。サイレンが鳴っても危険を感じない。

上流にダムがない場合。日本の山々は第二次大戦後、針葉樹を植えてきた。広葉樹は極端に減少している。木の根の広さ、深さは断然広葉樹が大きい。当然保水力も大きい。そのため山崩れ防止には広葉樹のはたす役割が大きい。結果、日本の河川は鉄砲水、土石流が多くなる。先般の神奈川玄倉川での増水はこのケースである。

日本のキャンプ場と指定されているところも問題がある。当山には徳島市が管理する中津峰森林公園のキャンプ場、中津峰山頂の勝浦町が管理するオートキャンプ場がある。前者は避難小屋と公衆電話があるが後者はそれもない。共にシーズン前に草刈り程度で管理人はいない。

数年前米国ミシガン州のスオミ大学に行った。学生たちの入学オリエンテーションにスペリオル湖岸のカッパーハーバーという景勝地のキャンプ場があてられた。結果、かの国のキャンプ施設を垣間見ることとなった。国立公園のなかのキャンプ場は範囲が明確にされ、そこ以外はキャンプできない。おそらく反則金があるのだろう）オートキャンプ中心に考えられているためスペースは広い。キャンプサイトのまん中に電気のコンセントの柱がある。トレーラーで引っ張ってきたキャンピングカーをそこに据えて電気につなぐ。そして野外テラスをつくって悠々と生活する。テントを張る場所は車がこない位置に完備されている。キャンピングカーには便所がないらしく、共通の公衆便所、お湯が出るシャワールーム、洗濯施設（お湯、乾燥機つき）が完備している。もちろんキャンプ場は有料であるが料金は安く、管理は行き届いている。おそらく、人的、自然的、危機管理の安全面でも十分できているのであろう。ほったらかし、汚いといった日本のキャンプ場とはくらべものにならない。

先にあげた米国のキャンプ場ならお金を取って管理している以上、そこで事故が起きると管理責任で訴訟となるだろう。だが、日本のキャンプ場で管理人がいてもそれだけの権限と責任が与えられてはいないのが実状である。この草稿を執筆中建設省が「緊急情報」で強制排除も検討していると報道された。

ネパール紀行
（続ブータン紀行）

ブータン、パロ空港を出発したドウルック航空は晴天の山々を見ながら飛ぶ。ヒマラヤがきれいに見え始めた。遠景にカンチェンジュンガ山群、チョモラーリ山群、エベレストが山群見えるという。最後部座席にいた私はオペラグラスを出して山々を眺めていた。前席のドイツ人に貸してやり気をよくしていると彼らはもうちょっと良い望遠鏡を出して見始めた。そのくせこっちには貸してくれない。ケチな連中だ。山また山どこかに目標を定めて見る必要があるのだが、山々の名はわからない。二時間のフライトは瞬く間にカトマンズに着いた。午後、後述する市内観光の後、明日朝は今回の旅行のもう一つの柱である。ヒマラヤ遊覧飛行である。

平成二年のとき、私は下痢をして、このマウンテン・フライトをあきらめた。そうしたら悪気流につき飛行中止になった。そのように五〇％ぐらいの確率だそうだ。その日は早朝五時に起き、朝食抜きで空港へ向かう国内線は空港の左側、今日は飛べるかな」と思いつつ中に入る。ツアコンの大島さんは「ではここで待っています」と行ってしまう。スムーズに進んで空港内のバスに乗った。しばらく進むと途中でで止まってしまった。滑走路を見ていると国内各地への小さい飛行機が飛んでゆく、前回仏陀の生誕地まで

11/23百味供養会

一冊の本『買ってはいけない』　週間金曜日編

週間金曜日」なる雑誌、今まで私は全く知らなかった。私のようなイケイケドンドンの人間が読む本ではないらしい。食べ物、飲み物、洗剤、化粧品、薬、雑貨、にわたって具体的な一九二の商品をあげている。今、よく売れている商品のうちからこの商品をのけてしまうと我々の市民生活がなりたたなくなるのでないだろうか。そういう思いでページをめくった。どうもおかしい」というのが私の本能的実感であった。

この種の本なら、まず基本的手順として食品ならその食品のきちんとした成分分析の結果が添付し、その上で論じるべきであろう等々を思っていた矢先。文芸春秋九月号に『ウソ、誇張、ねじまげを徹底検証　買ってはいけないは』インチキ本だ」という日垣隆氏の論文が載った。まず、週間金曜日」は市民運動家によく読まれ、各地で読者会が組織されるほど熱心な定期購読者に支えられているという。一つサークルのテキストとして四万五千人ほどのある種のマニアの本が週間金曜日」であった。それが今や百万部を越える勢いで売れに売れている。若い人に聞いてみるとこの本に書かれているのでいやになったという。一マニアの軍団が楽しむのはよいが、百万人に広げると社会騒乱を扇動する本とはいえまいか。一例をあげればどの薬も難しい認可を受けた薬で薬害ではない。

日垣論文を紹介すると『同書の全体を貫く独自の『文法』によるところが大きい。例えばヤマザキクリームパン批判は、次のような文章構造になっている。

コンビニやスーパーには山崎製パンの商品が多い→たくさんの食品添加物が使用されている→これはヤマザキパンに限ったことではない→いくつかの添加物の危険性を述べる→保存料は最近の増殖を防ぐわけだから細菌にとって毒物である→細菌と人間の細胞もつくりは基本的に同じなのだから、胃や腸の細胞に悪いに決まっている。

このような文章構造になっているから、メーカーとしても反論しにくかったのだろう」という。

無作為にページをめくって別章を改めてこの文章方程式に照らし、検証するたしかに解読できる。

この種の刊行物で昔から定評のあるのは　暮らしの手帳』である。この雑誌は一品目の商品をテストするのに無作為の複数店頭で定価で買ってきたものを独自の方法で商品テストし、方法論は公示する。この本には広告は一切の掲載しない。これが大政翼賛会　ポシガリマセンカツマデハ」のキャッチコピー作りから転向した破廉恥評論家ともいわれる花森安治のポリシーである。こうした態度で初て市販の商品テストが可能であった。

本書にかえると本当に製品検査がなされたか。ならどういう方法でということが疑わしい。詳しくは本書と日垣論文を読んで検証してみるとおもしろい。

週間金曜日」の発行人・編集委員、本書の発行人本田勝一は昔聞いたことがあると思って、故細川隆元氏の戦後、日本をだめにした学者・文化人』を紐解くと第一番に出ているのが彼である。彼は千葉大薬学部、京大農学部農林生物学科に学び、『カナダ・エスキモー』等々の探検家に近い書物で一世を風靡し、ベトナム戦争時、かの国に渡ってベトナム報告をだした。それが国際理解に貢献した人に与えられる『ボーン賞』を受賞。そへんからおかしくなって、『片面彫り師』といわれるほどの左傾イデオロギーをもってたくさんの難しい書物を出し、人々を洗脳したと評論されている。私は今では顧みられない言論人と思っていたら、こんな本で今まで生きのび、洗脳していたかと思うとおどろきだ。『買ってはいけない』第一は本書である。

バスで八時間ほどかかったが、ルンビニ・エアウェーズも飛んでいる。バスが再び走り出した。ただし、ターミナル向かって。『ファーストフライトからもうすぐ情報が入ります。その結果によってフライトします」と。とうとうターミナルの待合所でコーヒがでてきた。『こら、また。あかんな。ツキについていた今度の旅もこれで終わりか」と覚悟を決めた。それでもみんなに言うわけには行かない。待つこと小一時間。バスに乗れという。こんどこそは飛ぶのか。あきらめると向こうから来ると言うことわざどおりか。

とうとう飛行機の下に来た。ブッダ・エアと書いてある。お釈迦様に抱かれて飛ぶとは幸いである。前にアメリカで乗った十九人乗りよりもう一回り小さい座席が一列のプロペラ機。念願かなっての出発である。エベレストまで行って帰ってくる一時間余りのフライトである。

離陸した。見慣れた風景の空港周辺を通過するとすぐ雪山が見え始める。強い光線の中、限りなく白い山々と青い空、大陸氷河のU字谷が雄大に切れ込んでいる。とぎすました爪のような尾根に雪風が舞う。真下のU字谷の谷底は広い。丸い小さな湖も見える。昨日見たのは緑の山の遠くに雪山であった。今日とは迫力が違う。ただ今、世界の屋根ヒマラヤのエベレスト山群のど真ん中にいるのだ。ローツエ、ヌブツエ、マカルー、それにエベレストが手をのばせばとどくほどになってきた。乗客全員が順番にコックピットに入れてくれる。私はちょうどエベレストを迂回するところで順番が回ってきた。ここのガラスは客室のものとは違う前百八十度はっきり見える。チョットと羽をつけてエベレスト山頂まで一跨ぎ、妙な錯覚が出てくる　俺は世界一高いエベレストの上にいる」と叫びたくなるような感動を押さえ座席にもどる。平穏に見える飛行だが、おそらくエベレスト山塊の尾根を卓越して吹く風は相当だろう。気流の変化も大きいという。そこを慎重に、おそらく九千メートル余りの高度で水平に飛行する。

フライトを終えるとツアーコンダクターの大嶋さんが迎えてくれる。なんでもない風景だがツアコンは一緒に飛行できないらしい。このことは帰って二週間後ニュージーランドの事故で実感した。

彼岸の中日

春の彼岸に　彼岸の話」を書いた。要約すると　此岸」に対する言葉が　彼岸」。此岸」はこちらの岸でこの世の世界、迷う迷わせる世界、暗い夜。彼岸」はあの世、佛様の世界、覚れるもの世界、明るい昼。夏は昼は長いが夜は短く、冬は昼が短く夜が長い。両者が一番接近する日を彼岸に中日という。佛様と一番近づける日である。よって昔から春秋の中日前後一週間をお彼岸として、ご先祖様を我が家にお招きして供養をした。

大上幸子さんは夫厚蔵さんとともに長年当山を手伝ってくれた。早くつれあいを亡くした幸子さんは数年前まで一人暮らしであった。曰く　私は一人でないんでよ。窓から見るとお観音ざんの燈が見える。いつもお観音さんと話ししとるけん。さびしいないんでよ」というのが口癖であった。元気の一語につきる一生をおくっていた。よる年並みには勝てず病で倒れ、しばらく入院のち去る六月十六日八十六歳を一期として天寿を全うした。

百箇日がちょうど彼岸の中日に当たる。六人の子供、つれあいから孫、曾孫にいたる大勢にかこまれて盛大に供養される。住職夫婦子供たちにとって　おばちゃん」は我々を見守ってくれた大恩人である。おばちゃん衷心よりご冥福をお祈りします。

余録

台風の基礎知識を掲載したらとたんに熱帯低気圧がたくさん来襲。今年の夏の特色となった。太平洋高気圧がずっと北上していた太平洋上で発生するため大きく発達できなくて台風にはなれないらしい。でも、今年の台風は例年並に発生している太平洋高気圧が先述の様子のため。香港、中国本土といってしまった。

先般、東ティモールで独立か否かで住民投票が国連の監視のもとで行われた。結果は圧倒的に独立派の勝利。その後、独立反対派が騒乱を起こしている。日本はいつもながら外国機をチャーターして、スタコラサッサと逃げ帰った。本当にこれでいいのか。

独立は認められたものの、さしたる産業もない、徳島県ぐらいの人口の国を国ぐらしていくには、これから三年間は国連が手伝うが、そのような時間で国造りはできない。たいんな苦労があろう。独立反対派は騒乱を起こした。彼らはインドネシアに残ろうとして戦った。が、それを鎮圧するのは当面インドネシア軍。彼らはなんのために戦っているのであろうか。インドネシアのような他民族、他言語、他宗教、他人種、異なった歴史等）国家はこうなった形の独立運動がたえない。それにしても旧宗主国ポルトガルは無責任極まるではないか。